

武田泰淳全集

第四卷

武田泰淳全集

第四卷

筑摩書房

武田泰淳全集 第四卷

昭和四十六年八月二十日 第一刷発行

著 者 武 田 泰 淳

発 行 者 竹 之 内 静 雄

発 行 所

東京都千代田区神田小川町二ノ八
株式会社 筑摩書房

電話 東京(元)七六五一(代表)
振替 東京 四一 二二三
郵便番号 一〇二一九一

印刷 株式会社 三松堂
製本 和田製本工業株式会社

(分類) 0393 (製品) 72404 (出版社) 4604

武田泰淳全集

3 報 月
付録 卷 4
1971 年 8 月

目次

武田さんと中国の旅……………	尾崎秀樹
武田秘伝伝授……………	瀬戸内晴美
武田泰淳氏との交友記(上)……………	増田 渉

東京都千代田区
神田小川町2の8
筑摩書房

武田さんと中国の旅

尾崎秀樹

武田泰淳さんと中国の各地を旅行したのは、四年前の一九六七年春のことだ。ほかに作家の杉森久英、永井路子などがいた。ちょうどプロレタリア文化大革命がおし進められているさなかのことで、各地で造反のあらしが吹き荒れ、私たちもその熱気にあてられたようなかたちであった。

なにしろ深圳の駅に一步ふみこむと、とたんに「毛主席語録」を一冊ずつ手渡され、それから行く先々で語録の学習、語録を歌曲化した歌や踊りが、サーピス過剰なくらいに行われて、こちらは心身ともにゆさぶられるという状況

態だった。おかげで旅行中に十曲近く歌をおぼえてしまったほどだった。今でもなにかのはずみにその歌曲がフイと口をついてでる。

広州から北京へとび、西安を経て上海、杭州、長沙などを三週間ほどの間にかくめぐつたが、その間に魯迅の生まれ故郷である紹興にたち寄ることができたのは収穫であった。ちょうど武田さんは秋瑾の伝記小説「秋風秋雨人を愁殺す」を「展望」に連載中で、四月、五月と続き、一月おいてさらに七、八、九月の計五回、この作品は掲載された。間に一回中休みがあるのは、中国旅行がはさまっているからだ。

そのため「秋風秋雨人を愁殺す」を執筆する作者の姿勢を裏から眺め、ときには同じ場にたつてたしかめることができ、興味をおぼえた。秋瑾は一九〇七年七月、紹興の大通学堂で逮捕され、翌日軒亭口で処刑された。その処刑

場跡には記念碑が建っている。私たちは杭州から車で紹興の接待所へたどりついたが、魯迅記念館ほどには秋瑾の遺跡について高い評価がなされていないためか、それとも秋瑾にたいする日本人の関心が唐突に思われたのか、魯迅関係の遺跡をまわるほどにはスラッとうけなかった。

秋瑾女士記念碑の台石には、「打倒劉少奇！」などというスローガンが残っており、どうやらわれわれが訪ねる直前まで、記念碑の表面にもベタベタと壁新聞がはられていたらしく、その跡が歴然とみられた。武田さんはその記念碑の前で、何枚かの写真をとる。私たちがカメラをむけると、附近にいた子どもたちがげんそうにのぞきこむので、なかなかうまく焦点がきまらない。

記念碑の裏は石段になっており、そこからは水郷の街、紹興の名物である水路が通じている。おそらく魯迅の旧居の前を流れる水路にも、ここからゆけるのであろう。魯迅の生家は記念館になっている。「故郷」に登場する閩土の孫（？）だという人物が、その管理者で、旧居は一度人手に渡ったが、解放後公のものとなり、記念館に整備されたと説明する。

三味書屋や百草園は「朝花夕拾」に描かれたそのままだった。三味書屋には、魯迅が遅刻して、自戒のため机の片

隅に「早」の一字をきざみつけたのはつきりと残っている。そうなるともう、魯迅の作品世界に生きている思いで、あれこれと欲がでてくる。閩土は紹興特産のフェルト帽であるチャンマオを被って登場してくるが、武田さんもそういった思いにとりつかれていたのだろう。チャンマオ、チャンマオということになって、やっと街角の店でもとめることができた。

値段はたしか三円六十何銭、日本の定価になおすと、五百八十円ほどになる。一般の工人帽にくらべると、少し高いように思った。私は茶目っ気をだしてさっそくかぶってみたが、これがとんだ失敗、一度湯通しをしなければならぬのを知らずにかぶったものだから、帽子の洗料がとけてすっかり顔からシャツまで黒くなってしまった。

武田泰淳さんはそのほかに大きな肉切庖丁も買った。紹興まで来て、酔狂に帽子や庖丁を買われわれの気が知れないといった表情で、中国人の通訳はあきれている。だが私たちの気持としては、ほかならぬ紹興でそれを買うことに、おおいに意義を見出していたのだ。

紹興の街では、また紹興酒の製造所にも寄った。鑑湖の水でつくられる紹興酒は、日本でいう灘の生一本だ。アルコール度はそれほど高くないが、トロリとした舌先の味が

なんともいえない。元紅とか善醸、加飯、香雪などいろいろあり、その由来などを聞きながら試し酒ということになったが、私はちように禁酒中であり、泰淳さんや杉森さんの目を細めて試飲するのがうらやましかった。

紹興からの帰路、私たちは水郷風景を満喫できた。ちょうど潮来を思わせる風景で、流れがゆるいらしく、下りの船は帆をかけてゆくが、上りはひき舟だ。ボルガの舟歌にでもでてくるようなゆったりした調子で、数人の者が舟を引いてゆく。その後から江南の風物誌である水牛が、これまたノタリノタリと大きな角をゆりながらやってくる。その鼻につないだ環の下からたれたヨダレが、ツーツとのびているのに、なかなか切れない。そんな光景のひとつひとつが、魯迅の作品を彩どる景物詩になっている。

「まったく魯迅の作品の世界だ。『朝花夕拾』のあれだね」泰淳さんはうなずいていたが、まったく同感だ。光景がそのまま絵になっているのである。杭州から長沙へ行き、毛主席の生誕地である韶山にも入った。北京では前門外の全聚徳で烤鴨子も食べた。西安では眠い目をこすりながら涮羊肉も食べに行った。上海のホテルでは、とくにたのんで油条に焼餅をもとめた。私はチョコマカとまわって、あれを食べ、これを買ひ、文革下の中国を旅しながら、まこ

とに申しわけなく思うことがあったが、泰淳さんはそういった私を、いつも眼鏡のおくからあたたく眺めてくれて、それが私の、そして同行者みんなのあたたくい雰囲気をつくるのに役立っていたことも事実である。一九六七年の中国の旅は、私にとって忘れられない数週間であった。

(評論家)

武田秘伝伝授

瀬戸内晴美

昭和三十八年七月のことだから、今から大よそ一昔も前の話である。私ははじめて武田泰淳氏と北海道へ旅行した。どこかの新聞社主催の講演が仕事であった。講演旅行の時ほど同行の人が気がかりなことはない。あんまりなじみのない人や、あんまり肩の凝る人や、日頃、何となく虫が好かないかと思っている人が一緒だと聞かされると、行く前から気持が沈んでしまう。それまで武田泰淳氏は私にとって怖い近づき難い人であった。三十六年に私は田村俊子賞を貰っていたが、氏は俊子賞の選者であって、三十六年以来、毎年、四月十六日の俊子忌には北鎌倉の東慶寺で俊

子賞の受賞式が行われるので、そこでお逢いしている。とはいっても、私は当日は受付やお茶運びに忙しいので、氏と親しくお話したりする機会はなかった。その年の俊子忌も、私が受付をしていると武田氏が可愛らしい女の人と一緒に入ってこられた。会費と引かえにお弁当の券を渡すのが私の役目であったから、私はお二人分の券を目的のチャージングな可愛らしいひとに渡しにいった。

「先生は選者ですから会費はいただかないでよろしいそうです。お嬢さまの分だけ五百円いただきます」

すると行きすぎかけていた武田氏が立ちどまって私とお嬢さんの顔を見比べ、ほうというような表情をされた。私はよせばいいのに、可愛らしい人におつりを渡しながら

「学校はどちらですか」

といってしまった。私はその人を武田氏のお嬢さんでたぶん高校三年か大学一年くらいと信じこんでしまっていたのである。すると可愛い人は片手を口にあててふふふと笑い出し、武田氏が「家内です」と私におっしゃった。私はたぶん、きやつとか、ぎやつとか叫んだと思う。ことほど左様に、当時私は武田氏を高年齢者と信じこんでいたし、畏れ敬っていたのであった。

その時の大失敗があつて、私はかえつて武田氏に以前よ

りは親しみを感じていたが、それも一方的で、やはりその珍問答以来、お話らしいこともしたことのない仲であつた。

「えらい方と一緒に旅は気がはりますねえ」

私は主催者にそんな重い返事をして出かけた。しかしその旅はまことに愉しかった。

薄茶色の変り型の夏のスーツを着た旅姿の武田氏はそれまでではるかに眺めていたどの武田氏よりも若々しく見えた。奥さまをお嬢さまとまちがえるようなそっかしい私を武田氏も悪人や根性悪とはよも思われぬであろう。そう思うととたんに気がゆるんで、私の癖で、あとは十年の知己のごとくなつてしまひ、お喋りになって、明けつぱろげになつてしまふのであつた。その日、私はいく分そわそわする問題をかかえていた。とうとうがまんが出来ず、札幌のホテルのロビーでその滑稽な個人的悩みを打ちあげた。それは三十八年度上半期の芥川、直木賞の銓衡日が今日という日の晩に當っていた。

私の「みれん」が、直木賞候補に上つていて、しかも大そう有力だとかで新聞記者が旅先のホテルまで追つてきていた。

「実は私、もらいたくないんです。それに、みれんが直木賞候補に入ったことも納得いかないし」

私は珍しくじめじめしてぐちっぽく語った。

武田氏は優しい目の目尻をちよつと下げるように笑顔をつくって、齒から抜けるような声で軽くおっしゃった。

「いらないねえ」

それからふつと生真面目な怖い表情になり、声は同じ調子でつけたされた。

「くれたら断るんだな」

「あっ、そうですね」

私は反射的につぶやいた。さつと、目を洗われたような気がした。仏教の悟りという心境はあの一瞬に似ているの



昭和27年 取材『天と地の結婚』

かもしれないと後で思った。その時の講演は「仏教」が主題で、私のはかの子と仏教について語り、武田氏は文学と仏教について語られていた。

その晩遅く私はホテルの部屋のテレビで芥川、直木賞の発表を見た。河野多恵子さんの

「蟹」が芥川賞、佐藤得二さんの「女のいくさ」が直木賞であった。私は安見児を得た鎌足の歌を電報にして河野さんに発し、久しぶりでせいせいして安眠した。

「厭なことは断ればいい」という大そうはつきりした何でもないことが、世の中では案外その通り行われていない。私は武田氏からこのことを教えられたと思った。それ以来、これを実行してみると急に世界がまわりがたつたような気がしてきた。ひとつの人生の極意の伝授を受けたのではないかと思う。

何年かたって、私は武田氏がある賞の受賞を断られたことを新聞で見た。爽やかな気分であった。

気分がさっぱりした残りの旅はいっそう愉しくなった。

武田氏に案内していただいた支笏湖の水の青さやそこに至る森林の中の神秘的な道の美しさは忘れられない。もっと忘れられないのは、最後の夜、すすき野のバーで武田氏が突然にこにこして「瀬戸内さん踊りましようか」と誘ってくれたことであった。私は喜んで立ち上った。外に誰も踊ってなんぞいなかった。武田氏は私に軽く手を廻すと、「ぼくは下手ですよ、これしか出来ないんだからな」といって、すつと頬を寄せてこられた。私たちはのどかにチークダンスを愉しんだ。同行の人やホステスさんたちがこに

こ拍手していた。武田氏のダンスはなかなかどうして下手どころではなかったのである。

私は氏の作品の中では、世評に高い数々の作品はともかくとして、「女の部屋」が一番好きだ。あのヒロインのような可愛らしい、いきいきした女を戦後まだ誰も書いていない。

もうひとつ私は武田氏から伝記文学の極意を伝授されたことがある。いつだったかの東慶寺の会の後だった。縁側で牡丹を見ていたら、いつのまにか背後に来ていられた武田氏が「瀬戸内さんのかの子は、かの子を全部わかったというところで書いてあるよね。人間なんか、わかりっこないやね、そうだろう、そこが、瀬戸内さんのかの子撩乱の好さで欠点だね」

私はその時、目の中から牡丹がずっと遠のいた。秋瑾女士の伝記はこのことばを作品で示してくれたものとして私は格別の想いで読んだ。以来、私は伝記が以前よりもはるかに書き易くなった。もし最近の私の伝記にまともりがなしいとしたら、或いはわからないところの曖昧さがかえって人間を出しているとしたら、それはすべて武田秘伝伝授のたまものであろう。

(作家)

武田泰淳氏との交友記(上)

増田 渉

武田泰淳氏との交友は、四十年くらい前にはじまる。正確には、「中国文学研究会」が結成されてからだから、その結成は昭和九年で、会の機関誌『中国文学月報』の発刊が昭和十年三月だ。そうすると四十年といっても、実は三十七年ほど前のことになる。あまりにも年月がたちすぎ、またあまりにもわれわれは(少くとも私は)年をとりすぎたので、記憶のほどは、どうもぼやけたものになっている。最初の泰淳氏との出あいのことともハッキリしないが、多分そのころ竹内好宅で、時々やっていた同人会の席で、はじめて知ったように思う。何しろそのころの泰淳氏は、私の印象としては、口かずをあまりきかない、坊主アタマで、黒っぽい着物をきて、からだごとジツと凝りかたまつて、考えこんでいるような存在で、ジミな人柄に見えた。後から思うと、「思想問題」でつかまつたりした直後の泰淳氏だったからではなからうか。

機関誌『中国文学月報』に書くものも、よく調べた研究

的(？)なものが多くように思われた。最近、自分の蔵書を少し整理していたら、スタインの『西域考古記』(向達訳)という本があり、またどこかの中国の大学で出した『文学年報』という雑誌が出てきたが、これらは確か三十数年前、何かの必要から泰淳氏の書齋で見で、借りてきたものだと思ひ出したが、およそそのような書籍、雑誌にも当時の泰淳氏の研究的(？)態度の一端がしのばれるというものだ。いまは小説家になっているが、若いころはなかなかの勉強家だった、ということをお願いしたいわけだが、これは泰淳氏に限ったことではなく、「中国文学研究会」の同人たちは、若いころ、みんな相当に勉強をした。当時の日本の、漢学アカデミズムに反抗して、直接、現実の中国にふれ、そこからわれわれのものを学びとろうとする「まじめさ」といったものを、みんながもっていたと思う。無論、当時の泰淳氏の場合も例外ではなかったということである。だから二十何歳の若さで、泰淳氏は『司馬遷』(後に『史記の世界』と改題)を書くこともできたわけだ。

『司馬遷』によって、一部具眼の士から、泰淳氏自身がすぐれた具眼の士であることを認められることになったのだから(この本をよんでから泰淳氏を『批評』の同人に迎えた)、いつか山本健吉から聞いたことがある。山本氏は当時

『改造社』にいて私と同僚だった)、その書物があるいは機縁になったのかと思うが、泰淳氏は倉石武四郎氏によって北海道大学の助教授に推薦された。私はその辞令書を泰淳氏の家で見せてもらったことを覚えていいる。ただし初めて大学で講義するというのは、実は少々同氏も面食ったもののように、あるとき、どこへ行くところであつたかは忘れたが、私は泰淳氏と一しよに三宅坂あたりを走る電車の吊皮にぶら下っていたが、突然彼は私に、どんなことをいえばいいの、私の講義ノートを見せてもらいたいといった。「イヤだね、自分で何かつくって喋ればいいんだよ」と私は素気なくことわつたことを思い出す。というのが、私は当時、本職の教師ではなく、急ごしらえの雇われ講師であつたし、友人に自分の講義ノートを見せるのは、何とも気はずかしいことだったからである。後から聞いた話だが、結局、泰淳氏は北海道へ赴任はしたものの、教室へは一ぺんも顔を出さずじまいで、帰ってしまったのだという。

教室へは一ぺんも出ないで、大学助教授を二個月でやめ、北海道を去つた泰淳氏は、突然、雑誌『人間』に小説『才子佳人』を書いた。これは中国の清朝の、乾隆ごろの『西青散記』という日記体の回想的随筆からタネをとつた

小説であるが、この小説が評判になったかどうか私の記憶にはない。しかし『人間』に小説を発表したことは、われわれには（少くとも私には）ちよつとショックであった。

次に『象徴』とかいう季刊誌（？）にまたもや小説を発表した。これは私も読んだが、何か淫奔（？）な女性のことが書いてあった。私は別にこれに感心した記憶はないが、ただ当時、竹内好がほめたと泰淳氏から聞いたことを覚えてゐる。

そのころのことだが、故奥野信太郎が、武田君が小説を書いた、もう二つか三つ、つづけて書けば文壇に出られるから、応援せねば、という意味のことを私に語った。私はそのころ確か慶応の講師をしていて、奥野氏とはよく顔を合せていた。奥野氏は別に泰淳氏と親しい間柄でもなかったが、同じ中国文学の仲間という意識があったからのようだ。それで慶応出身の人たち（片山、青山、那須）がやっていた「思索社」という出版社の雑誌『個性』に、武田君を推薦したと奥野氏が私に話したことを覚えてゐる。この『個性』に出たのが『嬢のすえ』か『愛』のかたち」かだったと思う。それが評判になって、彼はとうとう小説家になってしまった（というのが私の感想）。

『才子佳人』をはじめ、幾つかの小説ができて、泰淳氏は

はじめて単行本『才子佳人』を出版した。出版したのは私の知人M君たちがやっていた「東方書店」だったと思うが、その彼の最初の小説集を装釘したのは私だった。「中国文学研究会」の同人のなかでは、多少、絵ころ（？）があるように私は思われていたらしいが、とにかく泰淳氏は私に装釘をやってくれといった。下手な田舎くさい装釘で、今では汗顔ものだが、とにかく表紙の『才子佳人』という字を朱で書き、それに改琦の『紅樓夢図詠』から、中国の佳人を青い線で写して装飾とした。ただし私の指定した色を印刷所がうまく出してくれていなかったで、よけいに泥くさいものになり、自分としては不満だった。だが武田泰淳の第一小説集の装釘をやったということは、今では光栄（？）のことかも知れない。

（つづく）

〈第四回配本〉第五巻小説5

愛と誓い・流人島にて・異形の者・迷路・遠くの旗・恐怖と快感・動物・青木さんの過失・ひかりごけ・紅葉・声なき男・密室・火の接吻・ゴーストアップ・青黒き河のほとり・遊覧地・敵の秘密・につぼんの美男美女・悲恋・燃えあがるみどりの底・ウラニウム青春・汝の母を！・杭を打つ・グロテスク・誰を方舟に残すか・怪人物・独裁者と共に・良妻賢母

解説・開高健

第四卷 目 次

美貌の信徒	3
耳	16
勝 負	26
飛瀑の女	44
父子の情	63
幻 聴	70
銀色の客人	88
風媒花	102
天と地の結婚	271
解 題	457
解 説	447

小田切秀雄

小

説

4

美貌の信徒

K病院は神奈川県S市の郊外、なだらかな丘陵の一角を占めている。簡素な木造の教会堂、低い金網の垣に薔薇の蔓をからませて区切られた平坦な敷地、細い木組を白く塗ったアーチ型の開放的な正門、金髪の児童のたわむれる石畳の通路、すべてキリスト教病院らしき清楚なおもむきである。毎朝十時にはオルガンの音が漏れ、毎週土曜には善男善女が家族うち連れ立って、異国風な祈りに集う。新教再臨派では、土曜日が休日である。自家用車を横づけにする外人の信徒が多いが、附近の貧しい日本人も自由に出入している。

婦長はたくましい外国婦人だが、看護婦の大部分は、未婚の日本女性である。一風変わった事件を惹き起した竹村星子は、仲間の信望を一身に集めた美貌の一等看護婦であった。

看護婦はもちろん熱烈な信徒、したがって患者の取扱いは鄭重である。彼女たちにとって、病院内の勤務は神への

奉仕、献身の行為である。禁酒禁煙、見舞の客も煙草に火を点ずるのを遠慮せねばならない。彼女たちの皮膚が卵の殻に似てすべすべしているのは、菜食主義を堅く守っているためである。会話もささやくように低く、靴音高く廊下や控室に踏み入った客は、彼女たちの漂わす静粛と温和な雰囲気、思わず息をひそめて、四囲をうかがう程である。

その夜、竹村星子はベルの音を聴くと、白い帽子の下に、父親ゆずりの濃い眉をかすかにひきしめ、二階の看護室を出た。女学校を想わせる玄関の扉は常にひらかれ、夜半の客はベルを以て案内を乞う。白昼でも靴ぬぎ場に守衛一人いないのは、盗難が皆無だからである。

白靴下に白短靴の足、どれも軽やかに、長身の星子が応接間に入ると患者はすでにクローム製の椅子の背にもたれて、顔を伏せていた。一見して、出産を希望する妊婦とわかる。緑色の外套、真紅のワンピースが、広い応接間に玉突台の如く置かれた長テーブルの向うに、毒々しくあざやかであ

る。「御入院ですか」と声を掛けても、乱れたパーマネントの髪をだらしなく垂した相手は首をあげない。陣痛が始まっているのかと傍へ寄りうとすると、夫らしき青年が重い扉を押してソフトを脱いだ。色の浅黒い、瘦型の美男子で、大きな風呂敷包みを手にしている。

「診察を受けに来られたこと御ありですか」

「いいえ、まだですが」と、男は気弱く答える。受持の医師の許可を経てから入院するのが規則である。妊婦はことに、血液検査や体質その他、予備知識を必要とする。

「そうですか。では患者カードもお持ちでないですね」物やさしくたずねられると、男は当惑のそぶりを示した。産科のベッドは二台空いている。人を救うのが義務である彼女は、急に迫られた客を逐い返すつもりはない。

「一人部屋はふさがっておりますが、皆さんと御一緒でよろしいですか」

「三等ですか。一等二等は駄目なんです。どうする、広子。三等でもいいだろ」

「厭だなあ。一人部屋は無いの？ 外から見たら灯のついていない部屋が見えたじゃないの」礼儀正しい夫にくらべ、ひどく乱暴な調子で若い妻は不満をむき出しにした。妊婦が色白の丸顔をグイと持ち上げたとき、冷静な星子もわずかながら表情をこわばらせた。半面の手ひどい火傷の筋が、

高い天井から落ちる電灯の光線に、鈍く光ったからである。まだ一年と経過しない傷痕である。口もとを赤黒く染めた不快な斑色が、まだ消え去っていない。

「ここはステイムがあるし、設備もいいよ。今さら仕方がない、入れてもらおうよ」

「だけど規則がやかましいんでしょ」

「ここなら信頼できるよ」

「あなたは厄介払いしたつもりで、いいかも知れないけど、わたし厭だなあ。西洋人ばかりだもの」

男がなだめるだけ、女は反抗的になる。星子は負けぬ気の女性だが、人並すぐれた意志の力で感情を抑制できる。

患者の非礼に一々動揺するような新米ではない。彼女の眼からすれば、患者のみならず、人類の全部が哀れみいつくしむべき罪人である。夫婦は二人とも鋭い眼光に邪惡の輝きを蔵しているが、彼女は平常通り分けへだて無く、階段を先に立った。

妊婦の寝衣、赤ん坊の産衣、おむつ、すべて病院から支給される。七つ並んだアメリカ式の高いベッドの一つに、支給された純白の寝衣に着換えて妻がもぐりこむと、青年は衣類を包み直して病室の外へ出た。階段の降り口で星子とすれちがう時、青年は「ちょっと」と、ねばっこいかすれ声を掛けた。「女房はこれがありますから気むずかしく

て」自分の片頬を指さして苦笑したが、それが陰気でわざとらしい。「この病院の方は皆さん親切らしいから、こちらでも安心してますが」

「同室の方、皆さん愉快にやっていますから、御心配なく」やれやれと言う形で肩をすばめて階段を降りて行く後姿は、善良な夫の物ではない。どんよりと濁った大きな眼は、いやらしかったが、その深い暗さが星子の印象に残った。

四谷広子と呼ぶその妊婦は、翌朝の六時に発育の良い女児を分娩した。健康な母体で、産は驚くほど軽い。「いいですか、大きく呼吸して。今度は息を詰めて」体操の号令のような星子の指図を、苦痛も見せずに最後までよく守った。顔面の一部が異様な光沢を放ち、蠟を塗ったように固張って見える。片側の頬がふくらと幼々しい白さで起伏するの、傷痕だけが無気味にひきつれている。必死の真剣さで妊婦に見守られながら、その腹部をもみほぐす操作の途中で、星子は生れて来る嬰兒の頬に、母の傷痕の無いことを祈った。千人を越す新生命の誕生に立会っている星子だが、異常のない嬰兒の顔貌を、産室のカーテンを漏れる、秋の朝の澄んだ光りに確かめると、新鮮な感覚が過労の四肢にみちわたった。

「あのひと気の毒だね」

院内にただ一人の日本人女医は、昼夜を分かたぬ多忙さに疲れ切った顔から、マスクをはずすと、星子に言った。

「傷がなければ立派な顔つきだね」

「赤ちゃんが出来たから、これで安心したでしょう」

有能な将校に対する忠実な下士官に似て、テキパキと事務的に答える星子の胸には、これであの奇妙な夫婦を結ぶ肉のベルトが出来たわと言う、しっとりした感慨があった。

四谷広子が院内の注目を集めたのは、彼女の火傷のためばかりではない。その無遠慮な性格と、もう一つ、若き夫の映画俳優じみた美貌のせいである。四谷夫人は、星子の冷徹な額や彫りの深い鼻すじを時には憎々しげに眺めやるが、さほど気難しくはない。出産完了の気軽さも手伝って、同室者を明るく笑いに誘うこともある。

西洋人の妊婦の仰山な悲鳴が、密閉した産室のガラスをひびかせると、彼女は嬉しそうに哄笑した。「意気地なし。日本の女の方が偉いわ」そのあたりかまわぬ高笑いに同室者は、西洋人看護婦に気がねして、眉をしかめた。「アラ、あの赤ちゃん、妙な泣声を出すわね。ミインミインで蟬みたいですね」面白がって、産室のさまざまな哭声に耳をすましていた広子のベッドへ、乳の時間に看護婦の抱いて来た赤ん坊が、正にその「蟬みたいな泣声」を発しはじめると、枕を並べた夫人たちは一せいにクスクス笑いだした。